

映画『ショーシャンクの空に』の主人公が実現した
ものとは何か：フランクが唱えた3
つの価値の視点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4416

映画『ショーシャンクの空に』の主人公が実現したものとは何か — フランクルが唱えた 3 つの価値の視点から —

学芸学部 国際英語学科 高橋 悟

要旨：映画『ショーシャンクの空に』は公開後四半世紀年以上を経た今日でも世界中で多くの人々の共感を呼び、愛され続けている。本稿の目的は、その高い評価を得ている作品の中で主人公のアンディ・デュフレーションが何を実現したのかを読み解き、明らかにすることである。そのために『夜と霧』の著者としても知られる、ヴィクトール・E・フランクルが唱えた 3 つの価値の視点から、主人公の言動に着目し論考を進めた。その結果、彼が成し遂げたものは単に脱獄に留まらず、究極的には希望という大きな価値を自己と他者の胸中に作り出したこと（創造価値の実現）、自他共に生きる喜びや意味を実感できる体験を紡いだこと（体験価値の実現）、人間の心や芸術にも内在するあらゆる美なるものを愛し、その対極にあるあらゆる醜なるものを憎む態度を堅持し、それを自己の振る舞いの中に具現化したこと（態度価値の実現）が確認された。これらの価値実現を通じて彼は、日々を必死に生きる私たちもまた決して無力ではなく、ありのままの姿で、なお多くの価値を生み出せる存在であることを教えてくれているように思われる。

キーワード：ショーシャンクの空に、フランクル、創造価値、体験価値、態度価値

1. はじめに

1994 年に公開されたアメリカ映画『ショーシャンクの空に（原題：The Shawshank Redemption）』（監督：フランク・ダラボン）は、封切り当初はさほどヒットしなかったものの、巷間で徐々に人気が広がり、現在では「死ぬ前に観るべき映画」の一つとして高い評価を得るに至っている（Berry, 2015）。また Amazon 社の子会社として 500 万本以上の映像コンテンツを保有・提供する IMDb 社の映画評価ランキング（Top Rated Movies）においても、2019 年 9 月末現在、本作品は第 1 位の座を保っている。公開から四半世紀以上を経て、今なお世界的に多くの人々が深く共感する本映画は不朽の名作といっても過言ではないであろう。

本作品に通底する大きなテーマとしては、①希望（渡辺, 1995; 鷺巣, 1995; Sobol, 1996; Sánchez-Escalonilla, 2005; 姜, 2007; Parse, 2007; 西内, 2009）、②友情（Darabont, 1996; 黒川, 2005; 金澤, 2017; 米林, 2017）、③宗教性（キリスト教的要素）（姜, 2007; Reinhartz, 2013; 服部, 2019）などが挙げられることが多い。

これらを踏まえたうえで高橋（2019a）は他の脱獄映画 6 本と本作品を比較し、後者の独創性として、主人公アンディ・デュフレーションの①冤罪、②高い社会的

地位、③豊かな教養と深い専門性、④広範で持続性のある利他的行為、⑤ひ弱な肉体、⑥脱獄作業の非開示、⑦極端に長い収監期間、⑧明確な脱獄後のイメージの保有、⑨脱獄後の囚人仲間との再会、⑩復讐、及び⑪囚人仲間が抱いた出所後の社会適応への不安、さらに⑫主人公の親友の囚人によるナレーション、の 12 点を抽出している。

また高橋（2019b）は、Katz（1974）が唱えた 3 つの基本スキル（技術的スキル、対人的スキル、概念的スキル）の視点から本作品の主人公アンディの言動を詳細に分析し、「深慮遠謀の概念的スキルを基盤とした 3 スキルの複合体こそが彼の魅力の最大の源泉であり、本作品の魅力に直結している」との見解を述べている。

それではアンディはこれら 3 つの基本スキルを駆使することによって、一体何を成し遂げたのであろうか。換言すれば、どのような価値を実現したのであろうか。それらを明らかにすることが本稿の目的である。その目的達成のため、本稿ではヴィクトール・E・フランクルが唱えた 3 つの価値の視点から、映画の様々なシーンを振り返って論考を進めることとする。同視点を採用する理由は、映画（刑務所）と実話（強制収容所）の違いはあるものの、アンディとフランクルには特筆すべき共通項が認められるからである。すなわち両者

は、①一般社会においていわゆる知識階級に属し、②悪事を働いていないにもかかわらず囚われの身となり、③生きて再び外界に出られるか分からない過酷な環境下に無期限に置かれたのである。

なお本稿では、文学テキストの解釈技法（戸松，2012）を映画テキストに応用し、作品鑑賞を繰り返し、スクリーン上に表現された言葉や行動の意味を読み解き統合していくという解釈学的アプローチをとることとする。ちなみにフランクルの3つの価値の視点から本作品の内容や主人公について論じた文献は、管見の限り国内外では見当たらない。したがってこの視点の採用そのものが先例のない取り組みであるといえる。

2. 「ショーシャンクの空に」のストーリー

本作品は無実の罪で投獄された一人の男を主人公としている。舞台は米国東部メイン州で、時代設定は1940年代後半から1960年代後半にかけての約20年間である。主人公のアンディは、若くして大銀行の副頭取を務めていたが、ある晩泥酔して妻とその浮気相手を銃で撃ち殺したとして終身刑を言い渡される。

1947年にショーシャンク刑務所に収監された彼は所長や看守、他の囚人からの非道な仕打ちや暴行を受けながらも耐え忍び、その過程において自らのスキルや能力を発揮して周囲の信頼を得、所内における自らの存在を代替不可能なものにしていく。そして1966年に誰もが度肝を抜かれる脱獄劇を成功させる。

その後、ほどなくしてアンディの親友だったレッドに仮釈放が許可される。塙の外に出た彼は規則破りをしてアンディの跡を追い、メキシコ太平洋岸の白浜の上で感動の再会を果たすシーンで幕を閉じる。

3. フランクルと3つの価値

(1) ヴィクトール・E・フランクル

フランクルは1905年にオーストリアで生まれ、ウィーン大学で医学を修めた精神科医である。彼はユダヤ人であるという理由だけで1942年に強制収容所に入れられ、自らも生き地獄を味わいつつ、精神科医の視点から極限状態に置かれた人々を冷静に観察する。彼は奇跡的に生き延びて1945年に解放され、翌々年にその実体験を踏まえて綴った書籍を刊行した（諸富，2012）。同書はその後日本でも『夜と霧：ドイツ強制収容所の体験記録』という題名で出版され、ロングセラーとなっている。

彼が唱えた「創造価値」「体験価値」「態度価値」の3つの価値を扱った原稿は、実は収容所抑留前に途中

まで執筆されていた（諸富，2012）。解放後、それはいったん仕上げられて1952年に刊行され、日本でも『死と愛：実存分析入門』という題名で出版されている。しかしフランクルは初版本を出した後も加筆修正を行い、その作業を第11版まで続けた（山田，2011）。彼は1997年に没したが、本稿では主に彼の死後の2005年に発行された第11版を全訳した『人間とは何か：実存的治療法』という題名の翻訳書を参考にした。

(2) 3つの価値

フランクル（2011）は職業や労働、その他あらゆる能動的行為を通じて実現される価値を「創造価値」と呼んでいる。1986年に米国でドイツ語から英語へ翻訳・出版された“The Doctor and the Soul: From Psychotherapy to Logotherapy”という書籍の中で、この言葉は“creative values”と訳されている。この価値の概念は広く、例えば現代では、会社員、学生、芸術家、主婦が仕事や勉強、何らかの創造的行為に従事することによっても実現されるものである（諸富，2012）。

フランクルは創造価値について詳しく述べてはいないが、この価値には利己的（自己完結的）、利他的の2つ側面があると筆者は考える。例を挙げれば、他者の便益を想定せずに自分が楽しむためだけに絵画を描くことは自己完結的な側面にあたる。仮にある幼児が一人で楽しく画用紙に絵を描いているならば、その幼児は「お絵描き」という行為を通じて自己完結的な創造価値を実現しているといえる。

他方、本人の意図に関わらず結果的にある人が描いた絵画が他者の堪能や感動につながる場合、そこには利他的な創造価値が実現されていることになる。仮に親や大人が、子どもが描いた絵や作った詩、書いた手紙に感銘を受けるならば、そこには作品の巧拙を問わず、利他的な創造価値が現出しているといえよう。

ちなみにこの自己完結的、利他的な側面は他の2つの価値にも当てはまるものである。

第二の「体験価値」は、文字どおり体験を通じて実現される価値である。この言葉は先に挙げた“The Doctor and the Soul”という書籍の中では“experiential values”と英訳されている。フランクル（2011）は、「この価値は、世界を受容すること、たとえば自然や芸術の美しさに没入することによって実現される」と述べている。

彼は『夜と霧』において、絶望的状况にありながら、

搬送中の列車から見えた夕焼けの美しさに思わず感動を禁じ得ない囚人たちの姿を描写している。また最愛の妻と自分が共有したかけがえのない過去の体験、すなわち大切な思い出を心の拠り所とし、実際には眼前にいない妻があたかもそこにいるかのように、自分の心の中で彼女と対話することによって、苦難の中で生きる希望を見出していたことを明かしている（彼と妻は別々の収容所に入れられ、妻が抑留中に亡くなったことを彼が知ったのは自身が解放された後のことであった）。

また体験価値は過去の思い出に留まらず、間断なく実現され続けるものである。収容所でその当時の「今」を生きた فرانクルは『夜と霧』の中で、仲間と努めて交わした冗談やユーモアが「自分を見失わないための魂の武器」になったと述懐している。また囚人たちの演芸会で歌われた歌、吟じられた詩、楽器によって奏でられた音楽はどれもグロテスクなものであったが、それらでさえ彼の心を震わせ豊かなものにしてくれたと記している。

以上から創造価値と同様に体験価値にも、自己完結するもの、愛する人や仲間と共有されるもの、そして利他的影響力を持つものがあると理解される。フランクル（2011）は「体験価値は世界（自然・芸術）を自我の中に受動的に受け入れることによって実現される」と述べているが、その一方でこの価値は、受動的なインプットのみならず、自発的意志や自律的行動といった能動的なアウトプットが引き金となって実現されることも忘れてはならないであろう。

第三の「態度価値」とは、創造価値も体験価値も実現する機会を奪われた人間が、それでもなお実現することのできる、他者から決して奪われることのない、自己に内在する態度を基盤として実現される価値のことである。この言葉は先の“The Doctor and the Soul”という書籍の中では“attitudinal values”と英訳されている。フランクル（1961）はこれを「倫理的に高い価値」と位置づけ、「与えられた事態にある態度をとる人間の最後の自由」（フランクル、1961）であると、その本質は「人間が変えることのできないものをいかに受け入れるかということにある」（フランクル、2011）と述べている。

この態度価値について、フランクル（1993）は『それでも人生にイエスと言う』という著作の中で、ある末期の入院患者が取ったさりげなくも崇高な態度を例に次のような説明をしている。その男性患者は自らが数時間後に息絶えることを覚知し、医師であるフラン

クルの午後の回診時に、本来は夜打つべき注射を今打つことを望み、そうすればフランクルも看護師も安眠を妨げられずに済むという気配りの言葉を発したのである。それは「人間らしい無比の行い」であったとフランクル（1993）は振り返っている。

このやりとりから、態度価値にも自己完結的側面と利他的側面の両方があることを読み取ることができる。すなわち、その患者は他者を思いやることによって倫理的・道義的に高い自己を実現することができ、それによって内的満足を得られたと考えられる。その一方で彼の気高い態度に触発され、フランクルの心の中にも人として最も大切なものは態度に発した振る舞いであるとの確たる価値観が醸成されたと考えられることができる。その根拠として、フランクル自身が患者の言動に価値を見出し、その状況を具体例として特記している点、また別の機会にも創造価値、体験価値と比べ、態度価値こそが「最も偉大な価値実現の機会」（フランクル、2011）にあたりと主張している点が挙げられる。

以上、フランクルが唱えた3つの価値について紹介するとともに、それらに関する筆者の考えを付加してきた。これらの3つの異なる価値の境界や区分は明示されていないが、実際にはそれぞれの価値は互いに重なり合い、相互に影響し合っていると考えられる。

例えば、先の患者のフランクルに対する言動は、それを態度価値と受け止める器量を持つフランクルがいたからこそ、態度価値として認識されたのであり、そしてそれは彼とフランクルとの間に新たに生まれ共有された体験価値でもある。また先述した創造価値に関しても、ある創作物（例えば絵画、詩、音楽）がその作者の自己完結的、利他的といった元々の意図に関わらず、結果的に人間（自己や他者）に喜びや感動を与えるならば、そこには創造価値のみならず、体験価値も実現されていると考えることができるであろう。

しかしその創造価値、体験価値も所詮人間の心の中で感得されるものである以上、それらを価値あるものと受け止める鋭敏で豊かな感性や品性、あるいは生きていく上での心構えや姿勢といった、一人の人間の核心に関わる部分を源泉として実現される態度価値こそ最も根本的な価値であると考えられよう。

図1は態度価値を駆動的基盤とし、これらが三位一体となって実現されることによって、自己完結的、利他的な目的が達成される流れを示したものである。

4. 考察

第2節で述べたように本作品の主人公アンディは誰

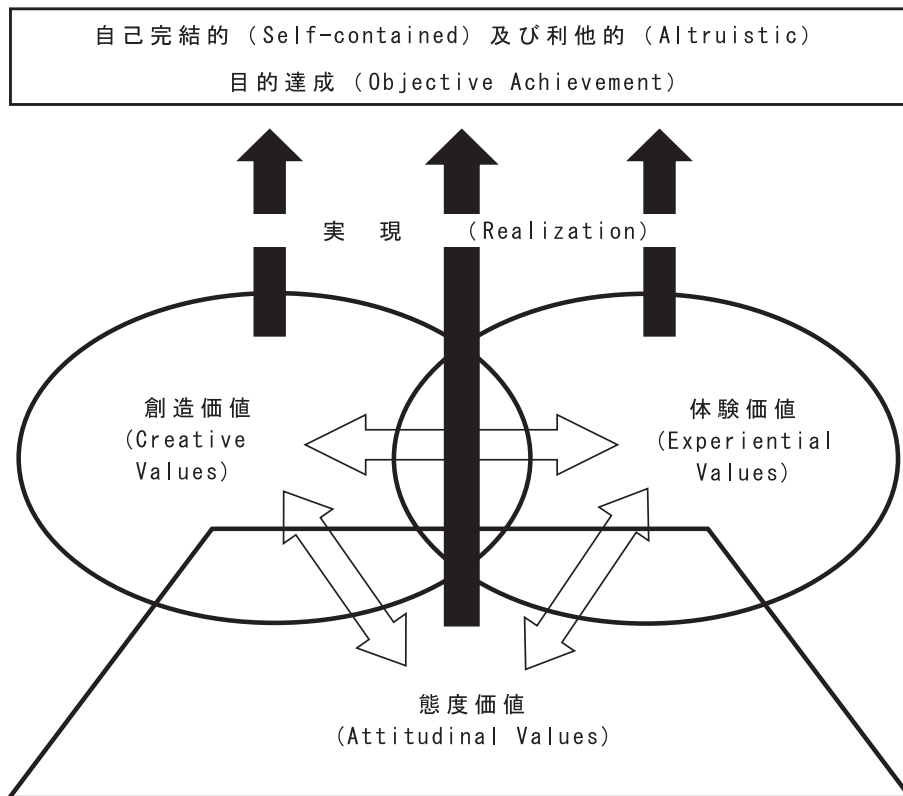


図1 フランクルが唱えた3つの価値と目的達成との関係

にも途中経過を明かさず、入獄から19年を経たある晩、突然かつ見事に脱獄を果たす。しかし彼が成し遂げたもの、実現したものは脱獄だけだったのだろうか。それ以外にもあるとすればそれは一体どのようなものだったのだろうか。本節ではこの問いに対する答えを探すべく、本作品のシーンに即してフランクルが唱えた3つの価値の視点から考察を試みる。

(1) 創造価値

1947年に収監されたアンディは刑務所内の労役に従事する傍ら、外界から密かに物品調達することに長けた囚人（後に親友となるレッド）に依頼し、ロックハンマーや研磨布を入手する。もともと鉋物マニアだった彼はこうした道具を使って石磨きの趣味を復活させる。磨かれた石は置物として彼の独房の窓に飾られたり、休憩時間にプレイするチェスの駒として使われたりするようになる。こうした行為はいわば彼の心を慰めるためのささやかな自己完結的な創造価値の実現であったといえよう。

アンディが元銀行員としての知識やスキルを活かし、最初に利他的な創造価値を実現するのは1949年のことである。屋上で仲間とコールタール塗りをしていた彼は刑務主任の話を偶然耳にし、その主任の相続税免

除の手続きを買って出る。これを機に彼は刑務所内で一目置かれるようになり、その彼に利用価値があると見込んだ所長は、彼を洗濯係から図書係へと格上げする。彼は図書係を務めながら刑務官たちや所長の所得申告を代行したり、自分の子どもの教育費を作りたいと申し出てきたある刑務官の相談にも乗ったりするようになる。さらには所長の不正蓄財まで手伝われるはめになるのだが、万一それが発覚しても所長が捕まらないよう、身代わりとなる人物を法の抜け道を突いて作り出す。その人物はランドール・スティープンスという名の架空の男性であり、書類上でしか存在しない「幽霊」であるが、出生証明書も運転免許証も持っていた。こうしてアンディは専門的・職業的スキルを活かし、その善悪は別として、利他的な創造価値を生み出し続けるのである。

その一方で彼は税務や会計以外の知識も存分に発揮する。メイン州議会に粘り強く陳情の手紙を送り、ついには中古の書籍やレコード、そして図書室拡充のための予算を獲得する。彼は受け取った書籍を仲間に指示してジャンル別に分類し書庫に整列させる。こうして彼は囚人たちが日常的に文化や芸術に接することができるような環境を整備するのである。

さらにアンディの利他的な創造価値の実現は「人づ

くり」という教育の領域にも及ぶ。新たに入所してきたトミーという名の若い囚人には、妻と女の赤子がいたが、彼は読み書きが不得手で高校も卒業していなかった。自分の将来を案じた彼は、ある日アンディに高卒資格を取りたいと申し出る。アンディは即座に断るが、トミーの意志の堅さを確認すると彼に学問の基礎を教授し始める。これを一年間続けたトミーは見事試験に合格し高卒資格を取得するのである。

以上、アンディが実現した趣味に関わる自己完結的な創造価値及び自らの専門性や教養をベースに実現した利他的な創造価値について述べた。しかし、彼は他に少なくとも二つの創造価値を実現している。

一つは、物理的に彼が脱獄用の穴を掘ったこと、すなわちトンネルを作ったことである。彼はその作業を行うことによって心のバランスを保ち、またその工程で発生する石くずを運動場に捨てることも密かな楽しみとしていた。つまり彼にとっては、小さな石ころを削ることも大きな穴を掘ることも、一心不乱に打ち込める「創作活動」という点において、同じように価値的な行為であったと考えることができる。

もう一つは、刑務所という劣悪な環境下において、彼が自分の心の中に「希望」を作り出したことである。その希望は、脱獄という単に刑務所外に出ることだけではなく、メキシコ太平洋岸のジワタネホという町に落ち着きホテルを経営するという、むしろ具体的かつ持続可能な行動目標に近いものであった。

そして彼が自らの意志と信念で作りに出した希望の灯火は、他の囚人たちにも燃え広がり、彼ら一人ひとりの胸中を明るく照らすようになる。アンディが脱獄した後も仲間は彼の思い出話に何度も花を咲かせるが、ほどなくして彼の親友だったレッドも仮出所を許可される。かつては渴望した娯楽世界だったが、40年に及ぶ刑務所生活ですっかり「施設慣れ」したレッドにとって一般社会の生活は苦痛以外の何物でもなかった。新たに襲われた絶望の中でレッドは入所中にアンディが自分に告げた郊外の牧草地を思い出し訪れる。そしてアンディが脱獄後、地中に隠した自分宛ての手紙と紙幣(旅費)を見つけ手に取る。その手紙には「希望は良いもの、多分最上のものだ。そして、良いものは決して消えることがない(Hope is a good thing, maybe the best of things, and no good thing ever dies.)」(アルク英語企画開発部編, 1998)と書かれてあった。

こうしてレッドはアンディの希望を自らの希望とし、仮釈放の規則を破ってアンディの跡を追い、青空の下、

ジワタネホの白浜で感動の再会を果たす。ここで本作品は壮麗な映像と音楽でエンディングを迎えるが、その後二人が異国の地で力を合わせ、ホテル経営を通じて新たな創造価値を実現していくことを予感させるのである。

以上から、アンディが生み出した最大の創造価値は自己と他者に生きる意味を与える「希望」だったのではないかと考えられる。またトンネル作りや脱獄だけではなく、それ以外の様々な無私・無償の行為の中にも大きな価値が宿っていたように思われる。このことは、彼自身が希望を抱くとともに、彼の存在自体が皆の希望となっていたことを示唆しているともいえよう。彼がもたらした利他的かつ持続性のある創造価値のおかげで、ある刑務官は子どもの教育に希望を見出し、トミーは自分と家族の生活に希望を見出した。またレッドを含む囚人たちはアンディの聡明で果敢な言動の中に生きる意味や喜び、素晴らしさを見出したと捉えることができるであろう。

(2) 体験価値

冤罪で投獄されたアンディは、生来の繊細な性格もあって、当初は他の囚人たちと交わることを避けていた。しかし二年を経たある日、屋上で仲間と共に作業をしていた彼は刑務主任の相続税免除の手続きを自分が無償でする代わりに、仲間ビールをご馳走してほしいと懇願する。この時彼は「外で働いている時のビールは最高です」と付言するが、実際には彼は支給されたビールには一切手を付けず、ただ笑みを浮かべて仲間が美味しそうに飲んでいるのを離れたところから眺めているだけであった。この状況について親友のレッドは「まさに1949年の春の珍事だった」とし、自分たちのことを「自由の身にでもなったみたいだ。シャバのように思えた。我々が神のようにも」というナレーションを入れている。

この状況から読み取れることは、アンディが刑務主任を手助けするとともに、仲間を喜ばせたいと自ら願って利他的な体験価値を生み出したということである。アンディが脱獄した後も、囚人仲間はこの日の出来事をよく覚えており、彼のおかげでビールにありつくと談笑するシーンが出てくる。その場面にレッドの次のナレーションが重なる。「彼が去って寂しくなる時もあるが、彼は自由に飛ぶべき鳥だったんだ。光り輝くその羽根。飛び立つ時、俺たちの心まで喜びに満ちる」と。

ここにおいて世界に大きく視野を広げれば、法華経

の行者・日蓮は13世紀に「喜とは自他共に喜ぶ事なり」(堀編, 1952)と弟子に説き、ロシアの文豪・トルストイは19世紀の著作『コサック』の中で主人公に「幸せとは、他人のために生きることにある」(トルストイ, 2012)と語らせている。まさにアンディの一連の振る舞いはこれら先哲の思想を時空を超えて体現したものであるといえよう。

本作品には、刑務所内の暴力や残酷な賭け事など否定的な側面が描かれている一方で、肯定的な側面も描かれている。例えば、食堂で仲間同士で語らう場面、作業中に軽口を叩き合う場面、運動場でキャッチボールをする場面、お気に入りの女優が出演する映画を皆で嬉々として鑑賞する場面などである。アンディに關しても休憩時間にレッドとチェスをする場面がある。こうした仲間と一緒に体験を共有することに加え、彼は独りで黙々と石を磨くことも好み、またレッド経由で入手した女優のポスターを壁に貼って眺めたりもしていた。

また彼は妻との思い出も宝物にしていた。そもそも彼が冤罪で投獄された原因は妻の浮気にあったのだが、それでも彼は妻をその死後もずっと愛し続けていた。彼はレッドに次のように悔恨と自責の念を吐露している。「美人だった。愛してた。でも表現できなくて…。私が妻を死に追いやったも同然だと思う」と。続けて彼はレッドに対し、かつて自分が妻に求婚した場所を訪れ、そこにある樫の木の下に埋めてある「何か」(アンディからレッドへの手紙とメキシコへの旅費であることは後に判明する)を掘り出すよう約束させる。

この言動から次の二点を伺い知ることができる。一点目は彼が妻と紡いできた思い出、すなわち体験価値を長年にわたって極めて大切にしてきたことである。彼は妻の不貞を許していたのである。二点目は無二の親友であるレッドに対し、今後の人生をメキシコで一緒に仕事をして過ごそうと誘うにあたって、意図して同じ場所を選んだことである。つまりアンディは妻に対面で「プロポーズ」したその場所で、今度はレッドに手紙で「プロポーズ」することにより、過去の体験にいわば上書きする形で新しい人生の起点を刻み込もうとしたのではないかと考えられるのである。

その他、アンディが実現した体験価値に関して二つほど言及する。

一つ目は州議会から寄贈された中古のレコードの中から「フィガロの結婚」を見つけ、それを放送室から流す場面である。彼は最初から刑務所中に聞こえるよう機械をセットし、その上で誰も入って来られないよ

う内側から施錠する。そして無断で放送したことを看守や所長から咎められると、今度はより一層音量を上げるという不敵な行動に打って出る。何百人という囚人たちが運動場に設置されたスピーカーを微動だにせずに見つめ、そこから流れ出る女性の美しい歌声を恍惚として聴き入る光景はこの映画の中でも最も壮観なシーンの一つであろう。ナレーションの中でレッドはこの歌声について「我々の頭上に優しく響き渡った。美しい鳥が訪れて塀を消すかのようだった。短い間だが、皆が自由な気分を味わった」と述べている。この行為が所長の逆鱗に触れ、アンディは二週間懲罰房に入れられる。しかし彼は最初からそうなることを知りながら、自分だけではなく、たとえ束の間であっても仲間に音楽を楽しんでほしいと願い、自己を犠牲にしてまで利他的な体験価値の実現を望んだものと考えられる。その一方で、彼はあえて懲罰房に入れられることを欲していた節もある。そのことは彼が懲罰房から解放され、食堂で仲間にも再び合流した時に、自分の頭と心(ハート)の中で独り静かに音楽を聴いていたと嬉しそうに語る場面から読み取ることができる。したがって、彼はまず利他的な体験価値を放送室で実現し、その上で自己完結的な体験価値を懲罰房で実現していたと考えることもできよう。

二つ目は、彼が脱獄決行の直前に自分が作ったチェスの駒を箱に詰めてビニール袋に入れ、それをロープで足に巻き付けてトンネルと下水管の中を這い進む場面である。脱獄の効率性だけを考えれば、それは文字どおり足手まといであり「お荷物」であつたらう。しかしチェスの駒は獄中であつてアンディが丹念に磨き上げた思い出の品であり、それはまた同時に将来レッドと再会できた後に新たな思い出を紡ぐための品でもあつたのである。その証拠に先述の仮出所したレッド宛ての手紙の中にはチェス盤を用意して待っているとの言葉が添えられている。このように物体としては単なるチェスの駒であっても、そこには過去の自己完結的な体験価値と未来の他者との共有を願う体験価値が凝縮されていたのである。

(3) 態度価値

先に述べたとおり態度価値は、創造価値も体験価値も実現する機会を奪われた一人の人間がそれでもなお実現することができる、息を引き取る最後の瞬間まで決して他者から奪われることのない価値である。それは人としての振る舞いに関わる最も崇高な価値であるとともに、それが駆動的基盤となって創造価値や体験価値

値を生み出す、一切の根源的な価値である。この価値は自動車に例えるならばエンジンとハンドルに相当し、他の二つの価値の中身や質、及びそれらが実現される速度やタイミングをコントロールするものであると考えられる。

本作品に通底するアンディの言動や生きる姿勢、そしてそれによって実現された態度価値について以下に述べていく。

アンディはレッドと運動場で初めて言葉を交わした時からレッドに好かれるようになる。その時レッドはアンディの静かで柔らかな物腰に他の連中とは異なる「何か」を感じ取る。それはアンディの鋭敏な感受性や彼が無意識に生み出す態度価値そのものではなかったかと思われる。短い会話を終えて立ち去るアンディの後ろ姿を見ながら「まるで公園を散策するかのように歩いていた。自分だけの世界を持っていたのだ」とレッドは語っている。この言葉は『夜と霧』の中の一節を想起させる。すなわち過酷な収容所生活に耐え抜くことができたのは粗野な人々よりもむしろ繊細で感受性の強い人々、つまり「おぞましい世界から遠ざかり、精神の自由の国、豊かな内面へと立ちもどる道」(フランクフルト, 1961) が開かれていた人々であったと記されている箇所である。

この日を境にレッドはアンディの味方となる。他方、もしこの時レッドがアンディのことを人間として好きになっていなければ、先述の「1949年の春の珍事」は起こらず、それを契機としてアンディの図書室係への昇格もなく、独房にポスターを貼ることも例外として認めてもらえなかったであろう。そうなれば穴を隠すこともできず、結局脱獄も成し得なかったであろうことを意味する。ごくわずかな時間のやりとりだったが、それはまさに「小事が大事」との箴言を象徴する前半のワンシーンであったといえよう。

本作品ではアンディの人に対する優しさや慈しみの心が様々な場面で描かれている。自分と同じ日に入所し翌朝までに亡くなった囚人の名前を食堂で尋ねる場面、仮釈放間近に気が動転し仲間の首元にナイフを突きつける老囚人をなだめる場面、全囚人の心を潤わそうと大音量でレコードをかける場面、仮釈放が却下されたレッドにハーモニカをプレゼントする場面、高卒資格取得試験の不出来に怒りを爆発させ答案用紙を丸めて捨てたトミーに対し立腹することなくその紙を冷静にゴミ箱から拾い上げる場面、投函した絵葉書の消印によって自分が脱獄後どこで国境を越えたかをレッドに知らせ喜ばせる場面、仮出所中のレッドに自分が

約束どおりに隠した手紙を読ませ彼に生きる希望を与える場面などである。

このように彼は、たとえ囚人であっても、人間には善性が備わっていると信じていたように見受けられるところがある。反対にその善性を自ら放棄し、他者を傷つけたり社会を欺いたりする者を彼は決して許すことはなかった。

囚人たちに理不尽な暴力を振るい、時には死に至らしめた刑務主任、そして不正蓄財に勤しみ、トミー殺害を命じた刑務所長に対し、彼らに見合う「罰」をアンディは用意し与えるのである。脱獄後、彼は所内の真実を白日の下に晒すべく証拠書類を付して新聞社に通報する。その結果、刑務主任は逮捕され、所長は自ら命を絶つ。彼らが自らの悪事に対する報いを受ける場面を見て、溜飲を下げた鑑賞者は少なくないであろう。

その他、アンディが実現したと考えられる態度価値について二つほど言及する。

一つは、彼の学問・教養及び芸術を大切にしている気持ちとその実践である。作品中では彼の学歴は明らかにされていないが、若くして大銀行の副頭取を務めていたことを考慮すれば、相当高度な学問を修め、豊かな教養と確かな見識を備えた人物であったと史料される。このような後天的に得られた素養がアンディという人物を形成したと考えられる。またそれと並行して美しいものを愛する心も醸成されていったと思われる。彼にとって石を磨くことは美しい造形物をこの世に生み出すこと、すなわち芸術的行為にはかならなかつたと理解される。また彼が寄贈されたばかりの多数の中古レコードの中から「フィガロの結婚」を適切に選び出し、その美しい音律をもって刑務所中の囚人たちを魅了したことはまさに彼の磨き抜かれた感性の為せる業であったといえよう。そのレコードを無断でかけたことにより懲罰房に入れられたアンディは二週間後に解放され、仲間と食堂で落ち合う。その時彼は「音楽は決して人から奪えない。そう思わないか？」と問いかけ、レッドに対し「心の豊かさを失っちゃダメだ。人間の心は石でできてるわけじゃない。心の中には何かある。誰も奪えないある物が…。君の心にも」と諭す。そしてそれは何かと尋ねるレッドに対し「希望だよ(Hope)」と答えるのである。

このアンディの言葉から音楽はまさに彼にとって重要な自身の一部となっていたということができよう。もちろんそれは音楽を価値あるものとして鑑賞することができる素養があったからこそであるが、その美に

対する認識や感性を自分だけでなく、仲間にも備えてほしいと願う彼の切なる気持ちが表れている場面でもあったといえよう。

もう一つの態度価値は、アンディが何事にも粘り強く取り組んだことである。それは彼が生きるうえでの基本姿勢としていたことであり、「根気」「持続力」「諦めない心」とも表現されうるものである。

一般社会で超エリートであった彼の胸にはおそらく様々な思いが去来したであろうが、囚人たちが活字や文化、芸術に触れられるようにするための労を惜しまなかった。図書室係に任命された彼は少しでも蔵書を豊富にしようと、州議会に毎週手紙を出して陳情し、六年後ようやくその望みが叶った後も、さらに毎週二通の手紙を出し、その四年後にはこの図書室のためだけに毎年500ドルの予算計上を州議会に決定させたのである。この出来事はアンディが常人では考えられないほどの根気強さと執念を持っていることを物語っているといえよう。

また彼が長い歳月をかけて脱獄用のトンネルを掘り続けたことも特筆に値する。彼はその穴が見つけれられてしまうことを恐れつつも、いつの日かジワタネホの浜辺に立つ自分の姿を思い描き、皆が寝静まった夜中に掘り続けた。トミーの死後、アンディとレッドは中庭で二人きりで話をする。その時アンディは自分の選択肢は二つに一つであり、それは「必死に生きるか、必死に死ぬか (Get busy living or get busy dying.)」であると告げる。この言葉は、『夜と霧』の中でフランクル(1961)が態度価値について述べた、「すなわち典型的な『収容所囚人』になるか、あるいはここにおいてもなお人間としてとどまり、人間としての尊厳を守る一人の人間になるかという決断である」との一節と符合すると思われる。

実は彼はすでに必死に生きることを選択済みだったのであるが、その時点では脱獄が成功する保証は全くなく、大きな不安を抱いていたと考えられる。永世棋聖の羽生(2005)は「何かに挑戦したら確実に報われるのであれば、誰でも必ず挑戦するだろう。報われないうちかもしれないところで、同じ情熱、気力、モチベーションをもって継続してやるのは非常に大変なことであり、私は、それこそが才能だと思っている」と語っているが、この至言はまさにアンディの姿勢や資質にそのまま当てはまるものであるといえよう。

なお彼は冤罪で投獄されたことを大きな「不運」と感じてはいたが、それに打ちのめされることはなかった。獄中にあっても強い心で自分を律し、希望を作り

出し、そしてそれに向かって「必死に生きる」ことによって、自身を「不幸」と感じることはなかったのではないかと思われる。

そして脱獄後もレッドが自分を訪ねてくることを根気強く待つのである。ジワタネホの砂浜で二人が感動の再会を果たすシーンについて、アンディ役を演じた俳優のティム・ロビンス (Tim Robbins) は、“off CAMERA with Sam Jones” という映像コンテンツのインタビューの中で、「多くのハッピーエンディングは映画上の技巧として仕組まれたものであるが、本作品のエンディングはそうではなく、長い苦難を経て獲得されたものであり、その稀有な真実性が多くの人々の深い共感を呼ぶ理由だと思う」との主旨の発言をしている。

以上、アンディの言動を通じて、彼の品性・知性・感性、人間を信じ慈しむ心、学問と芸術を愛する心、そして決して諦めない心について述べてきた。それらは誰も奪い取ることのできない彼固有の態度価値の源であり、3つの価値すべてを実現するための原動力・推進力でもあったといえよう。

5. 結論

本稿では、『ショーシャンクの空に』の主人公アンディが成し遂げたものについて、フランクルが唱えた3つの価値の視点から、本作品のシーンに即して考察を行った。その結果、彼は脱獄だけではなく、広範な創造価値、体験価値、態度価値を幾重にも実現してきたことが確認された。

各価値についてあえて要約するならば、創造価値に関しては、獄中であって「希望」という大きくかつ究極的な価値を自己と他者の胸中に作り出したといえよう。体験価値に関しては、自他共に生きる喜びや意味を実感できる体験を紡いだといえよう。その体験は彼が脱獄した後も、囚人たちの共通の思い出、すなわち「共有財産」となって生き続けることになる。そして態度価値に関しては、人間の心や芸術にも内在するあらゆる美なるものを愛し、その対極にあるあらゆる醜なるものを憎む態度を堅持し、それを自己の振る舞いの中に具現化していったといえよう。このように彼は様々な行為を通じて自己のみならず他者を利する価値を生み出した。しかしその根底には彼自身の信条や考え方、生きる姿勢など、人間の核を成す要素があり、それらを現実の行動の中で示したものが3つの価値だったのである。

本作品を今一度振り返れば、入獄後のアンディは他

の囚人たちと同様の粗末な服をまとい、同様の独房に入れられ、同様の労役を課された一囚人に過ぎなかった。しかし彼は3つの価値を着実に積み重ね、ついには自分の希望を叶えるに至る。このことは、平凡な人間であっても、生来備わる良心や徳性に従って懸命に生きるならば、その努力に応じて力量や技量をさらに伸ばし発揮し、ひいては他者や社会全体に便益をもたらすことができることを示唆しているのではないかと考えられる。反対に健気で善良な者を陥れたり貶めたりする邪悪な者には見えざる手によって必ずや鉄槌が下されることも示しているように思われる。

アンディには皆に憧れ慕われる救世主的な側面がある一方で、悩みや問題を抱えつつ日々を必死に生きる点において、我々にも十分に当てはまる側面があると考えられる。その意味で彼は3つの価値の実現を通じて、私たち一人ひとり決して無力ではなく、ありのままの姿で、なお多くの価値を生み出せる存在であることを教えてくれていると思われる。

参考文献

- アルク 英語企画開発部編 (1998) 『映画で覚える英会話 アルク・シネマ・シナリオシリーズ ショーシャンクの空に』, アルク.
- Berry, J. (2015) *The Shawshank Redemption*. In S. J. Schneider (Ed.), *1001 Movies You Must See Before You Die* (p. 833). Hauppauge: Barron's Educational Series, Inc.
- Darabont, F. (1996) *The Shawshank Redemption: The Shooting Script*. New York: Newmarket Press.
- フランクル, E. ヴィクトール (霜山徳爾訳) (1957) 『死と愛: 実存分析入門』, みすず書房.
- フランクル, E. ヴィクトール (霜山徳爾訳) (1961) 『夜と霧: ドイツ強制収容所の体験記録』, みすず書房.
- Frankl, E. V. (Translated by Richard & Clara Winston) (1986) *The Doctor and the Soul: From Psychotherapy to Logotherapy*. New York: Vintage Books.
- フランクル, E. ヴィクトール (山田邦男・松田美佳訳) (1993) 『それでも人生にイエスと言う』, 春秋社.
- フランクル, E. ヴィクトール (2011) (山田邦男監訳) 『人間とは何か: 実存的的精神療法』, 春秋社.
- 羽生善治 (2005) 『決断力』, 角川書店.
- 服部弘一郎 (2019) 『銀幕の中のキリスト教』, キリス

ト教新聞社.

- 堀日亨編 (1952) 『日蓮大聖人御書全集』, 創価学会.
- Internet Movie Database (IMDb). *Top Rated Movies*, <https://www.imdb.com/chart/top?ref_=nv_mv_250> (閲覧日: 2019年9月30日)
- 姜尚中 (2007) 「姜尚中 映画を語る (第21回)」, 『第三文明』, 第三文明社.
- 金澤誠 (2017) 「ショーシャンクの空に」, 前野裕一編, 『午前十時の映画祭8プログラム』, キネマ旬報社.
- Katz, L. R. (1974) Skills of an Effective Administrator. *Harvard Business Review*, 52(5), 90-102.
- 黒川裕一 (2005) 『見ずには死ねない! 名映画300選 (外国編)』, 中経出版.
- 諸富祥彦 (2012) 『100分de名著: フランクル『夜と霧』』, NHK出版.
- 西内誠 (2009) 「“Get busy living or get busy dying”: *The Shawshank Redemption* (1994)」, 『OLIVA』, 16, 97-155.
- Parse, R. P. (2007) Hope in “Rita Hayworth and Shawshank Redemption”: A Human Becoming Hermeneutic Study, *Nursing Science Quarterly*, 20(2), 148-154.
- Reinhartz, A. (2013) *Bible and Cinema: An Introduction*. Abingdon: Routledge.
- Robbins, T. “off CAMERA with Sam Jones”, <<https://www.youtube.com/watch?v=KbU0WPt-nYk>> (閲覧日: 2019年9月30日)
- Sánchez-Escalonilla, A. (2005) The Hero as a Visitor in Hell: The Descent into Death in Film Structure, *Journal of Popular Film and Television*, 32(4), 149-156.
- Sobol, J. J. (1996) *The Shawshank Redemption: A Review*, *Journal of Criminal Justice and Popular Culture*, 4(1), 15-17.
- 高橋悟 (2019a) 「『ショーシャンクの空に』の脱獄映画としての独創性」, 『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 9, 13-24.
- 高橋悟 (2019b) 「映画『ショーシャンクの空に』の主人公の魅力を解き明かす: Katzが唱えた3つの基本スキルの視点から」, 『英語と文化: 大阪樟蔭女子大学樟蔭英語学会誌』, 9, 15-24.
- トルストイ, N. レフ (乗松亨平訳) (2012) 『コサック: 1852年のコーカサス物語』, 光文社.
- 戸松泉 (2012) 「エクリチュールの解釈学: 森鷗外

『舞姫』の改稿をめぐる』, 松澤和宏編, 『テキストの解釈学』, 水声社.
鷺巣義明 (1995) 「スティーヴン・キング映画の系譜」, 『キネマ旬報』, 1162, 26-29.
渡辺祥子 (1995) 「ティム・ロビンズってほんとにいい役者」, 『キネマ旬報』, 1162, 24-25.
山田邦男 (2011) 「監訳者あとがき」, ヴィクトール・E・フランクル著 (山田邦男監訳) 『人間とは何か: 実存的な精神療法』, 春秋社.
米林聖 (2017) 「スティーヴン・キング主要作品解題」, 『ユリイカ』, 49(19), 219-239.

映画作品

『ショーシャンクの空に』 (*The Shawshank Redemption*). Dir. Frank Darabont. Castle Rock Entertainment, 1994. Shochiku Home Video, 2007. DVD.

(本稿の中で引用した登場人物のセリフは、特に記載のない限り、本映画作品の日本語字幕を採用した)

What Did the Main Character of *The Shawshank Redemption* Realize?: An Analysis from the Perspective of the Three Values Propounded by Frankl

Faculty of Liberal Arts, Department of English as an International Language
Satoru TAKAHASHI

Abstract

Even after over a quarter century since its release, the movie titled *The Shawshank Redemption* is widely loved and continues to resonate deeply with many people around the world. The purpose of this paper is to construe and clarify what the main character achieved in the story. To this end, the author looks into the film from the perspective of the three values Viktor E. Frankl propounded in his writing. As a result, it was unraveled that the main character not only broke out of prison but also realized “creative values”, “experiential values”, and “attitudinal values” in both self-confined and altruistic terms. Specifically, as for creative values, he ultimately created hope that brightened his soul and that of others. He also attained experiential values that taught him and other inmates the joy and meaning of life. Then, he exhibited attitudinal values through his sensible and compassionate behavior as a decent human being. Such integrity and virtue appear to come from his love for all things beautiful or noble and his hatred for all things filthy or evil. He seems, in essence, to tell us that we can realize those values as we “get busy living” our own lives.

Keywords: *The Shawshank Redemption*, Frankl, creative values, experiential values, attitudinal values